九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

奥田日記翻刻プロジェクトの概要

橋口，甚之輔

中園，敬生

城島，泰伸

天野，光義

他

https://doi.org/10.15017/1916272

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 1, pp.111-116, 2018-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)
バージョン：
権利関係：

【寄　稿】

奥田日記翻刻プロジェクトの概要

奥田日記翻刻のプロジェクト作業は 2017 年 6 月 1 日より開始した。

このプロジェクトは奥田八二氏の身近にいて、比較的に氏の文章になじみやすい方々に参画してもらった。無理を強いたきらいもないではない。もう分担を終えた人もあれば毎日日課としている人もある。

九州大文書館に収納されている奥田日記は膨大であり、最初から翻刻するのは荷が重いので、とりあえず知事就任から 3 期目の任期満了までの 12 年間分に取り掛かった。
しかし、3 期目はまだ手つかずである。これからまた翻刻者を募集しなければならない。

以下は担当分担表である。

奥田日記　翻刻プロジェクト

年次		担当者
1983	第 1 期	森山　英明
1984		天野　光義
1985		香川　忠雄
1986		城島　泰伸
1987	第 2 期	城島　泰伸
1988		奥田　直美
1989		橋口甚之輔
1990		中園　敬生
1991	第 3 期	
1992		
1993		
1994		
1995	退任	

資　料

奥田日記研究会

20170505

奥田日記ワード化プロジェクト要綱

目的：奥田日記の中で知事在任中（1983～1995）のエッセイ日記は奥田先生を理解し県政を読み解くうえで、重要である。関係者も相当高齢化しており、翻刻しデータ化す

ることが喫緊の課題である。経費も制限があり、ワード化はボランティアでお願いする。

資格：①Word を打てる環境にあること

②奥田先生にゆかりがあること

期間：2017 年 6 月からおおむね 1 年間。

主管：奥田日記研究会副会長　森山英明

著作権など：翻刻されたデータは九州大学文書館に属することとする。

「奥田日記」1989（平成元）年翻刻雑感

橋口甚之輔

1989 年 11 月の「ベルリンの壁」崩壊に関して、御園生等教授が当時の著書の序文で、向坂逸郎教授存命ならどの様な感慨を持たれただろうか、という風な事を書かれていた事を覚えている。だから、1989 年奥田日記のワープロ復刻を任された時、「Lucky！」と弾み、向坂門下異才の社会思想家奥田教授の「ベルリンの壁」に関する歴史観や如何?!と、一番の関心事に 11 月日記を漁った。

しかし、ベルリンの壁の撤去が始まる 11 月 9 日、奥田知事は太平洋戦没者の県慰霊巡拝団々長としてパラオ経由でペリリュー島へ出発、以降「ベルリンの壁」への言及は無い。ただ、11 月 30 日「ソ連、東欧は揺れに揺れ、この揺れの向こう側を当面見通すことはできない」という記述が目に付く。

この歳の正月二日、訪れた協会系の旧友達と「今日の生活の諸側面にも社会主義を照射することの必要性を私は強調した、そこが向坂協会と違う」と語り合うが、しかし、秋の 11 月 19 日、所謂太田協会の全国総会に際して「中曾根内閣の手により総評解体の筋が決まった。この種運動、前途は大へん暗い」と、身近な社会運動の前途を憂える様になる。

1989 年は、11 月 21 日「総評」が解散し新「連合」が結成され、日本労働運動史画期の年となる。しかし、所謂「革新県政」として誕生した奥田県政にとってこの動きは気懸かりである。早くも、10 月 28 日には「県職労が大会で社共共闘を否定し、第三期奥田県政を新連合でいくという、少々勇み足。社共という紐帯は大事にしないといけない。困難な局面である」と危機感も顕わである。

年頭の「1 月要記」では「心の中では三期目については否定的である。何で張り切らなくてはならないのか、疑問もわく」と心情を吐露。この奥田知事の三期目へのインセンティブの消極性の最大の心因には、その支持基盤「総評社会党ブロックも解体に向う」という日本の左派的政治潮流の衰退に対する寂寥感があると思われる。さて、奥田県政三期目はあるのか？二期目折り返し点の 1989 年日記乍らそこの明るさは見えない。

奥田知事日記翻刻雑感

中園敬生

奥田知事の日記が残っていることは、誰からか聞いた記憶があるし、それも一種類ではないとも言われていたような気がする。その日記の翻刻を森山さんから頼まれたのが、昨年の盆頃だが、急がなくてもいいということで、私が引き受けたのが 1990 年（平成 2 年）分である。奥田県政 2 期目の最終盤で、3 期目に出馬するかどうか、まだはっきりしていない頃のものらしい。

区切りがいいように昨年 9 月からとりかかった。9 月 1 日に 1990 年の 1 月 1 日分を翻刻し、毎日 1 日分をノルマとした。特別のことがない限り朝一番に約 30 分程度をかけてやっており、今やっと 4 ヶ月分が終わったところだが、寒い部屋で暖をとりながら、桜が散る舞鶴城を散歩する奥田知事が出てくる。

まず驚いたことに、激務の中で毎日欠かさず日記を書き続けたことである。体調も思わしくない中で議会はもとより、それ以外の会議や宴会に引っ張り出される愚痴があちこちに散見されるが、この場合の日記は、むしろ知事のストレスのはけ口になっていたのではないだろうか。

知事が「書」をたしなんでいたことは知っていた。奥田知事当選後に、県職労の旧北九州西支部役員で、知事の自宅にインタビューに行ったことがある。この時書いてもらった色紙が「観自在」であり、お布施事件でゆれる知事の心境が込められていて、今でも支部事務所に掲げてあるはずだ。

また俳句の会にも顔をだされていたようで、難しい中国の漢詩が引合いに出されると、とても私の手の届くところではなくなる。また仮名遣いや略字にも個人の癖があり、「経済」の二文字は全て「圣済」になっていて、私のパソコンでは、いちいち IME パットを開かないと変換できない。

更に驚いたことには、2 期目が終わろうとしているのに、まだ県議会では依然として「奥田いじめ」が続いていたことである。3 期目に出馬するかどうかの態度表明を迫られる知事の姿が垣間見える。体調を考えると無理はできないのだが、知事個人では決められない苦悩があったようだ。あちこちに生存している関係者の名前がでてくるので、時々ハラハラしている。

ただ、私にとって、県職労運動の中で一番の思い出の頃であり、この先の楽しみもある。亀井県政があのまま 5 期続いていたら、福岡県職労運動は持ちこたえていたかどうか、私は今でも疑問に思っている。その意味でも 1983 年の「奥田・豊島」選挙は、県職労だけではなく、当時の社会党や福岡県評運動にも大きな功績があったと思うし、もっと評価されてよいのではないだろうか。

「旗を鮮明にし、高く掲げよ」と言っていた晩年の奥田知事が思い出される。

（2018 年元旦記）

奥田日記の感想

城島泰伸

日記を読む限り、奥田知事は毎日 1 ページを丁寧に埋める真面目で几帳面な性格で、そこに優しさと忍耐強さを合せもつ人柄がにじみ出ていると感じた。日記のジャンルは基本方針を含む県政全般と県議会、家庭問題、趣味、健康、出版関係、支援団体との関係、県民対話等があるが、私が受け持った 1986（昭和 61）年は、奥田県政にとって一期目の最後の年で二期目再出馬へ向けての年であった。

そのため政府自民党はお布施事件以来、第二の奥田つぶしを狙って警察権力とマスコミを使って道路公社汚職事件を仕掛けてきた。その中で県政と議会運営の柱であり、知事を支えてきた近藤副知事と林県議の逮捕、拘留という最大の危機に見舞われ、ストレスと疲れから健康を害し帯状疱疹で 2 ヶ月入院というアクシデントにも見舞われた。その後の県議会での自民党を中心とする野党の攻撃はすさまじく、少数与党の中で聞くに堪えない罵詈雑言を浴びせられながらも、議会解散、再選挙も辞さずとの強い決意で知事、近藤副知事解任要求に耐え抜いたことが愚痴も含めて縷々記してある。表面はおとなしい感じだが、粘り強く撃たれ強い性格がよく出ている。

このような中で情報公開条例の制定、新福岡元年、技術立県、県民総立ち等の政策を着実に実現したことは大いに評価できるのではないかと思う。特に「県民対話」では県民に対する思いが県民とのふれあいに強く表れているように思う。それがさらに「県政ひとすじ」の出版へとつながっているように感じた。

そして二期目の選挙の最大の強敵の首藤氏が病気で脱落、田中健蔵氏が浮上したが、九大時代からその性格や政治力を知っているのかあまり問題にしていないように感じた。再選へ向けて消極的なところもあったが、きびしい攻撃を忍耐強く乗り切って再出馬までこぎつけた。結果的に再選へ向けて対立候補にも恵まれ、運の強い人であると感じた。
家庭問題では 3 月 14 日、個人的には一番苦しかった時代を支えてくれた同胞であるすぐ上の兄七二氏を亡くしたことは大きな痛手であったと思われる。

家庭問題や趣味は私生活、マージャン、俳句、揮毫等に対する様々な感慨が記されており、人間的な感じがよく出ている。習慣になっているとはいえ、何としてもこれだけの日記を毎日書くということは私にはできないことであり、大変なことであると思った。

奥田日記入力作業感想

天野光義

県政トップにあった社会学者の日記だから学ぶことは多いし、驚くことも少なくない。だがあくまでも個人としての日記である。市井に生きる人とほとんど変わらない気持ちの動きが綴られているという印象を受ける。

県庁組織という行政体のトップとして、あるいは革新勢力として日本有数の自治体の地域政治を改革していく政治勢力の要の役回りをしている人の記録を期待すると肩すかしということになる。

別な視点でいえば、自民党の県議達の理不尽極まりない妨害や、どこでどう間違ったのかマスメディアとの軋轢など、知事自身が望んだ政策展開を阻んだ外圧の大きさというものがもたらした停滞が悔やまれる内容が多い。

分からず屋集団に理想を持つ政治集団が、組織としてどのように対応したのかが知りたい者としては数ヶ月の日記をたどっても伝わってくるものは少ない。たまたま私が担当した時期にブレーン選びの動きが出てくる。

当時一県職員として私が熱望していたのは、全国から地域自治の確かな実績を持つブレーンを集めてオールジャパンの陣容を固めてほしいということだった。牢固とした保守県政の穴をうがつには生半可な反撃では不足であったろう。全国の経験と英知を集めなければ一歩も前に進まないだろうと考えていた。だがそのことに関し、組織的な動きは日記からは伝わってこない。極端にいえば一部の人の個人的な好悪や価値観でことが推移していったようにしか日記からは伝わってこない。

以上の物足りなさは、12 年間分の日記をまとめあげたときに鮮やかに浮き彫りになることで覆される。その意味で奥田知事の 12 年間の苦闘に満ちた歩みに報いるためにも、日記の全貌が整理されることを待ち望む。研究者達の英知を集め奥田県政の総括と分析作業の結果を記した本が上梓されることを心から願いたい。輝かしい営為の微々たる一翼を担うことができたことに感謝したい。

奥田日記翻刻の雑感

森山英明

「1983 年 4 月 22 日、はじめる。」この巻の日記は年初でない。

この日はいきなりメディア批判である。毎日新聞が朝刊で奥田夫妻が選挙期間中にお寺参りをしていたという記事を写真付きで掲載していた。夕刊で西日本新聞が追った。「それにしても報道ファシズムの時代になったことをつくづく感じさせられる」とある。翌日が初登庁の日である。根も葉もないまさにフェイクニュースでる。寺町を幸夫人と歩いていたのは瓜二つの兄・七二氏であった。

こうして奥田県政は始まった。

まだ翻刻は半ばだが強く印象付けられことがある。マスコミに追い立てられる日々にはストレスも並大抵ではなかったのだろう。普通、日記は 1 日、1 ページをあてるが、初めての東京・名古屋出張の折には実に 5 ページにわたっている。また 8 月 1 日は 8 ページにも上って、思いのたけを込めている。その中で自らが日記を書く意味も書いている。

マスコミ対応もさることながら、予算議会（6 月議会、7 月 31 日まで）の長丁場を乗り切らねばならなかった。その前に公約とそれまでの県政が外部団体と約束していたこととの整合性を探らねばならない。例えば白島である。何度も地元の支援団体や政党から石油備蓄はやめるべきだと申し入れてくる。一方、それまで推進してきた石油公団は「県の要請で備蓄基地を作っているのであって、県の対応次第だ」という。県庁の企画開発部門は「前知事の約束したものは約束として履行すべきだ」とレクチャーする。県職員の意思も無視できない。

次元は違うが、2017 年に就任した韓国の文在寅大統領も同じ悩みの中にあるのだろう。選挙で住民（国民）の意思が表されたのに、これに対して国政（行政）の継続性との間をどう埋めるのか、まさに文在寅大統領が対日外交で苦労している課題だと思う。奥田日記にはいつもこの種の問題で悩み続けた姿が日記の随所に表れている。ある意味で民主主義が持つ永遠の課題なのかもしれない。

他人の日記を読み、翻刻する作業は単なるのぞき見ではなかろう。本人は「もし知事になっていなければ大学教授として生涯を終わっただろうし、毎日日記を書くほどのネタもないだろう」と書いている。書いた人本人が公人であれば公式に記録された事がらが果たしてその通りなのか、当事者の言葉でもう一度確認する作業も必要であると思う。それが後々の研究者の真実の探求の一助になればこれに卓喜びはない。（森山　英明記 180105）